移住6年目の加藤さんに学ぶ

山の暮らしで気づいた家族にとって大事なこと

山梨県都留(つる)市
加藤大吾さん一家

子どもが生まれたことをきっかけに
2006年に東京から移住した加藤大吾さん一家は、現在5人家族。
自分たちで家を建て、畑や田んぼ、養鶏を営みます。
「子どもたちには何ごとも強制はしない。
でも、ときには刺激をあたえることも必要」と語る加藤さんに、
子育てにあたり大切にしていることを教えてもらいました。

文：長井史枝　撮影：押尾健太郎

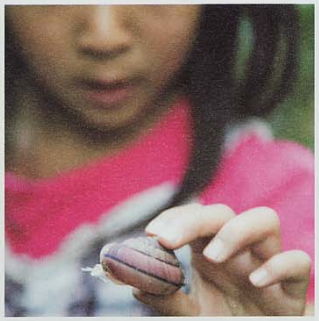
加藤さんち流子育て［1］

森でいろんなものに出会う

森には知らないことがいっぱいある。
「今年は、どんぐりが少ないから、
拾わないで山の動物に残しておこう」
「昔の人は、この葉っぱで歯みがきしたんだよ」
「あっ！　イノシシの足跡だ！」
たくさんの生きものと共存していることを
テレビからでも、図鑑からでもなく、
子どもたちは体感して学んでいる。

おかあの背中に揺られて

ぐんぐん歩くお姉ちゃんたちが遠くなる。まだ2歳の奏（そう）くんも、びっくりするくらいがんばって歩いたけれど、やっぱり途中で疲れた様子。「おかあ～」と両手をあげた。おんぶしてもらうと、見える景色が一気に広がる。



見つけたものは、宝もの

おっきなカタツムリ、40～50センチもある葉っぱでつくったおばけのお面、木の実いろいろ……。「ねえ、おとう、この実は食べられる？」見て、さわって、聞いて、たくさんのことをおぼえていく。見つけたものは、すべて宝もの。

ぬかるんだ山道で、足元にカメムシ発見。りょうの紫陽花をギュッと握ったまま、子どもの目は小さな虫にくぎづけになる。

鶏小屋には、ニワトリと鴨が合わせて30羽以上いる。集めた鶏糞を畑にまいて、肥料にするから、おいしい野菜が育つ。そんな生態系の循環を、子どもたちは、教科書からではなく、ここで学んでいる。

加藤さんち流子育て［2］

動物の世話をする

加藤さんちに同居する動物は、
ニワトリ、鴨、インコ、犬。
子どもにとって自分で面倒をみる
対象がいることはとても大事なこと。
元気なニワトリが産んだ卵をいただく。
だから「いただきます」と同時に、
「ありがとう」という気持ちが
自然と心の中に芽ばえる。

家族や田んぼを守る頼もしい存在

上／人なつこくておとなしい、加藤家の愛犬・モモ。ニワトリが庭に放たれたときには、ちゃんと鶏を追い、森に入れば家族を守る賢い犬。下／14羽の鴨たちも元気に育っている。加藤さんの田んぼに放てば、害虫や雑草を食べてくれる。右／インコの『みかんちゃん』。

加藤さんち流子育て［3］

暮らしのなかで火を使う

「たき火しよう！」と子どもが言う。
さらに続けて、
「大人になったとき、
火の使い方がわからなかったら困るもん」とも。
火は、暮らしに欠かせない大切なもの。
冷えた体をあたためてくれること、
でも、さわったら火傷することも
子どもたちは、ちゃんと知っている。

たき火にあたって、暖をとる

都会にいたら、なかなかできないけれど、加藤さんちではよくたき火をする。煙があがって、家族でじんわりとあたたまるひとときに、火のありがたさを感じる。

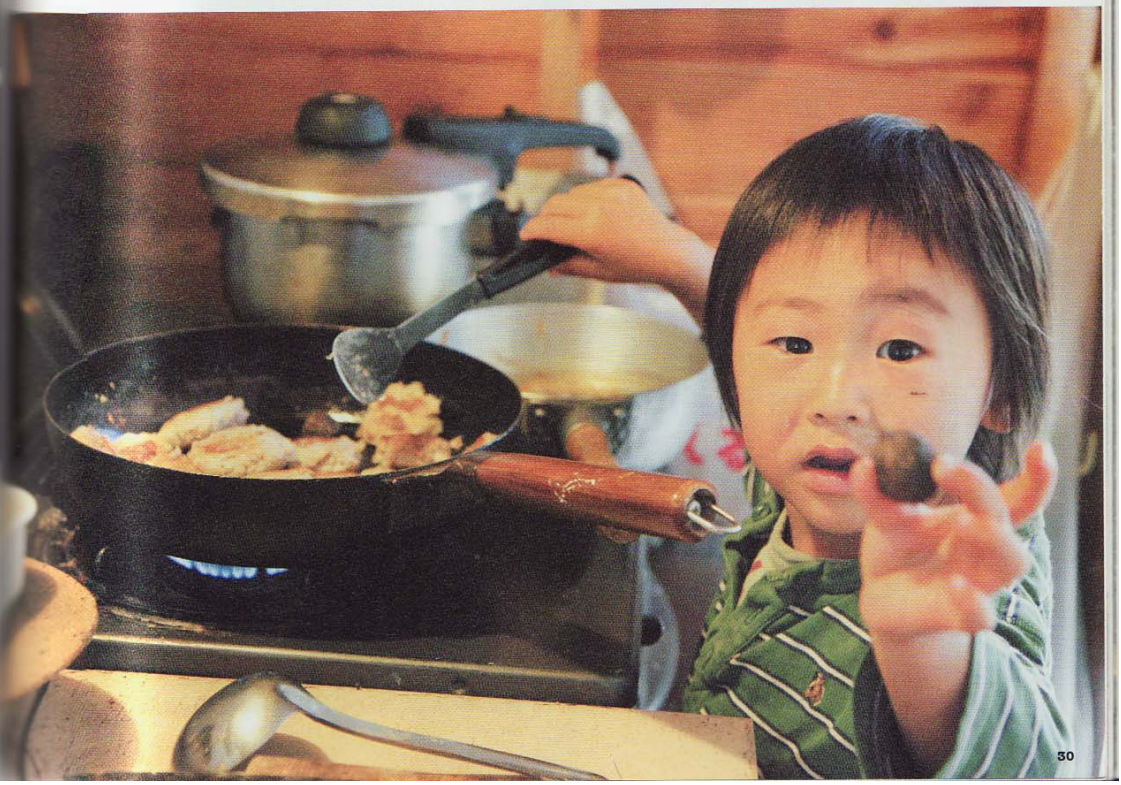
右／たき火のために枯葉集め。栗のイガはよく燃えることを本日発見！　左／待ちに待った、焼きリンゴが完成！　トロリと甘くて、みんな大満足の出来。

加藤さんち流子育て［4］

食べものをつくって食べる

子どもは田んぼに来て、
泥人形みたいになって遊んでるだけでもいい。
食べものがどうやってつくられるのか、
子どもたちが自然にわかることが大事。
それに、子どもは食べることが大好き。
小さいときから台所に立っているから
自分でつくって食べると、
もっとおいしいことも知っている。

おやつのクルミを夢中で食べていた奏くん。左手にクルミを握りしめたまま、今度は昼食づくりのお手伝い。小さな奏くんの目の前には薄根ハンバーグを焼くフライパン。「僕が焼くからおいしくなるんだよ！」

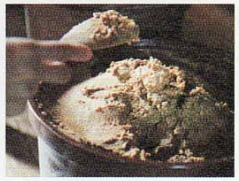


家族みんなが出入りする台所

上／昼食づくりを手伝う悠（ゆう）ちゃん。親子で手を動かしながら会話する時間は、とても大事。下／この台所でおいしいものがたくさんできる！　みんなでつくって食べるごはんは最高。

季節ごとに親子で保存食をつくる

上／柿をザルに並べて天日干しして、柿チップスをつくる。右下／自家製味噌は、5年前からつくりはじめた。子どもたちも、混ぜる作業を手伝う。左下／無農薬・無肥料の麦からつくった麺は、知人にも大好評。



米、麦、野菜……無理せずできることを

上／「米は例年だと600キロ収穫できるけど、今年は400キロくらいかなぁ」と加藤さん。米と味噌は買わなくても自給できる。下／こぼれた種から、庭の片すみに葉を伸ばす、力強いゴボウを発見。

本が大好きな長女。小学4年生の陽（はる）ちゃんの夢は考古学者になることなので、机の上には自分で描いた絵や化石など、、宝ものがたくさん並んでいる。机はおとうの手手づくりだ。

大切なことは子どもが感じて見つけてくる

山梨県の東部に位置する、山間の緑あふれる都留市。都心から車で約1時間半の加藤大吾さん宅の目印は〝熊出没注意〟の黄色い看板だ。自宅へと続く細い坂道の下で、長女の陽（はる）ちゃん、次女の悠（ゆう）ちゃんが「こっちだよー」と、手をふって待っていてくれた。クワックワックワ……と、鴨の鳴き声がするほうへ歩いていくと、加藤さんがおおらかな笑顔で立っている。

「いらっしゃい！　わかりにくかったですか？」

言うが早いか、子どもたちは養鶏小屋へと走りだし、鴨14羽、ニワトリ14羽、ひよこ13羽の世話を始めた。

「うちの鳥たちは雑種なんです。名古屋コーチン、熊本の天草大王（あまくさだいおう）……いろいろかけ合わせてるから毛色もいろいろでしょ」

なるほど、白、茶、黒、ごま模様のニワトリが、食欲旺盛にエサをつついている。

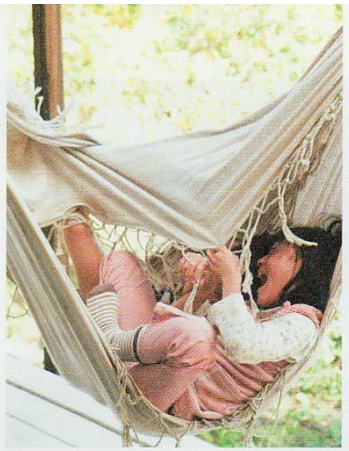
「おとうー、肩車してー」

母屋から出てきたのは奏（そう）くん2歳。まだ幼いが、足をしっかりと踏んばってでこぼこ道を歩く姿も頼もしい。

「子どものうちは、なるべく平坦な道は歩かせない。立って歩くことは基本だから、土や砂利道、草っぱらを歩かせると鍛えられていいですよ。子どもには、それぞれの成長の過程で必要なことがあるんです」

加藤さんが、世田谷から都留へと移住するきっかけとなったのは、未熟児で生まれてきた長女・陽ちゃんを育てる環境を考えたことに始まる。

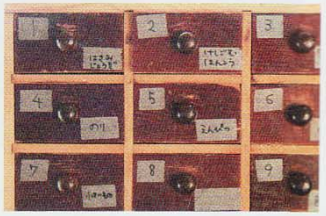
「小さく生まれた子どもが元気に育つためには、適度な刺激が必要だと思って。そし



上／ウッドデッキのハンモックで勢いよく遊ぶ、陽ちゃん、悠ちゃん姉妹。こわがる様子もなく、声をあげてじゃれあう。下／昼食後、ベランダで気持ちよさそうにお昼寝をしているのはお父さん。いつのまにか背中には奏くんが。

子どもが僕らの暮らしを先導してくれた

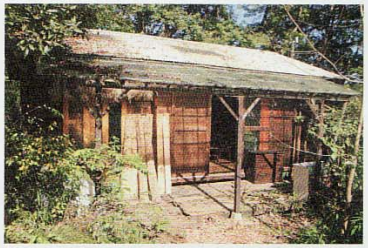
右上／悠ちゃんの道具箱。ビーズで指輪をつくったり、森で摘んできた花でブーケをつくる。右下／はさみや鉛筆などが入った引き出しには番号を貼った。「おかあ、あれどこ？」「5番に入ってるよ」。左／陽ちゃん作の絵本は何冊もある。「このページ、躍動感があるでしょ」と、お父さん。



昼食を食べおわってホッとひと息。おとうの膝を独占している奏くん。ハンモックの中には雅ちゃん、悠ちゃん。大切な家族のひとときを。

森を歩くと、野の花がいっぱい。悠ちゃんは、摘んできた花を、器用に蔓（つる）でぐるりと束ねて小さな花束をつくった。将来はお花屋さん？

右上／壁には子どもたちの作品。左上／陽光が降りそそぐ加藤家。下／母屋の横に建つのは最初にセルフビルドした家。



山の暮らしにとじこもってはダメ

たら、土を踏んで、水や火にふれられる環境がいちばんでしょう？　ある意味では、子どもが僕らの新たな暮らしを先導してくれたんです」

自分たちの居場所はどこだろう？　求めたのは、山奥の未開の大自然じゃない。都会や地域の人との交流や物流があって、縁や仕事が生まれるところが大前提だった。

「移住先を探した1年半の間、僕たちはどういうふうに生きたいのかね？　って、夫婦でとことん話し合いました。ケンカもしたけど、その時間があったからこそ、いまがある。ここに住もうと決めて、自分たちで家を建てはじめた頃は、もちろんトイレも風呂もなかった。それでも、家族のすみかを納得してつくってきたんです」

加藤さんは家をつくってみて、生活に対する価値観の変化に気づいたという。

「たとえば、うちの電球は、どれも10ワットくらいなんだけど、それで十分明るいなぁと思える。都会にいたときみたいな、ピカピカの明りは必要ないことも発見です」

しかし、奥さんの美里さんは、移住当初は不安もあった。

「父ちゃんが仕事で家をあけるときは、やっぱり不安でしたよ。でも同時に、自分が子どもたちを守らなきゃいけないって、強く思いました。都会では眠っていた本能なんでしょうね。自然のなかの暮らしは、不便なことも多いけど、きっと、よいことばかりじゃ満たされない。多少の大変さがあるから、喜びも倍増するところは、子育てと同じかな（笑）」

〝母は強し〟である。美里さんは、ここに自分の人生があるのだと教えてくれた。

「ねえ、あとで森に行く？」「帰ってきたら、たき火する？」「暗くなったらコンサートしたい」……。山の暮らしには、やりたいことがあふれている。子どもたちには時間がいくらあっても足りないようだ。

「よし、ごはん食べたら、森に行こう！」

「おかあも行きたい！」

美里さんも手をあげる。加藤さん一家には、大人だから、子どもだから何をしちゃいけない、これをしなきゃいけないという境界線はないのだ。小さい子にも包丁を握らせるし、大人だって一緒に遊んで、学んで、毎日いろんなことを発見する。

「田んぼもあって、家畜もいる。だから、やることはいっぱいあるけど、何ごとも子どもたちに強制はしません。田んぼに来て、泥人形みたいになって遊んでるだけでもいい。包丁で指を傷つけても、あぶないってことを、わかることが大切なんです」

加藤さん夫婦が、試行錯誤して居場所を見つけたかたわら、子どもたちも日々、五感をみがいている。そして、自由ななかにも、しかるべきところに親の配慮がある。

「夏休みには旅行に連れだして、いろんな風景を見せるようにしています。食べものや住まい、遊び……。ここがいちばんだと思っても、いまの暮らしにとじこもっていてはダメ。子どもたちには、たくさんの世界を知って、刺激を受けて、ちゃんと自分で生き方の選択をしてほしいから」

加藤大喜さん（37歳）
2005年、東京・世田谷から都留市に移住。「幸せ感あふれる生き方の実践者・提案者」として、農的暮らしと学びの場づくりを行う。企業の社員研修や、地元・都留文科大学との協働事業など、活動は多岐にわたる。妻・美里さん（34歳）、陽ちゃん（9歳）、悠ちゃん（6歳）、奏くん（2歳）の5人家族。